

〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

ジャベリンとナパーム弾

FGM-148Javelin (ジャベリン) をご存じだろうか。ウィキペディアによるとアメリカで開発製造された歩兵携行式多目的ミサイルであり、主目標は戦車などの装甲戦闘車両であるが、建築物や野戦築城、さらには低空を飛行するヘリコプターへの攻撃能力も備える・・・とある。この武器が一時マスコミでちょくちょく取り上げられた。それは、ロシアの戦車部隊に蹂躪された地域をウクライナが奪還し始めたとき、そのきっかけとなったのがこのジャベリンの使用にあるというのだ。歩兵が担げる重量しかないこの兵器は、敵戦車のそばまで行って照準を合わせて発射すれば、90 パーセント以上の的中率とのこと。しかも、戦車の一番薄い装甲である上部を上から攻撃する「トップアタック」が可能である。この兵器をアメリカがウクライナに提供したことで、ロシアの侵攻が阻まれたとの見方がある。

この報道の示しているムードには共通しているものがあつた。それは、侵略してきたロシアをウクライナの人々が、破壊の代名詞である戦車に近づき、新兵器で倒して劣勢を挽回したというストーリーである。悪のロシアに対して、自らを守るウクライナ兵。この単純な構図によって、見る者は「安心して」この報道に触れることができる。「ウクライナがんばれ！」と口に出したいくらいかもしれない。

ジャベリンでトップアタックされた戦車の搭乗員は、爆裂の衝撃で死ぬか、高熱で蒸し焼きになるかして、ほぼ 100 パーセント助からない。ただし、このことは報道ではあまり取り上げられてはいない。

ウクライナ側の発表では、8 月 22 日時点でのウクライナ兵士は 9,000 人が死亡。もちろんこれに民間人は含まれていないし、亡くならないまでもロシア側に連行された人々も多くいるはずだ。それに対して、ロシア側の死者は 9 月時点で 5,937 人と発表している。ただこの数字はロシア政府側の発表なので真実かはわからない。アメリカ中央情報局の推計では、ロシア側には 8 月時点で 15000 人の死者が出ているとしている。もちろん、ケガをした人間まで含めれば 7 万とも 8 万とも言われている。ウクライナ兵とロシア兵の死者だけを足しても、もう 24,000 人だ。この死者たちを善と悪に分けられるのだろうか。戦車の中で蒸し焼きになったロシア兵は、自分たちが悪だから死んでゆくのだと思ったのだろうか。拷問の果てに殺されたウクライナ兵は、自分が正義なのだという自覚のもとに死んでいったのだろうか。国家と国家の戦いである戦争は、常にそれぞれの正義が振りかざされる。そして、その結果が「歴史」となってきた。国という単位から「戦争」を考えるならば、このような思考しか生まれえない。

しかし、蒸し焼きにされたロシア兵や、拷問で死んだウクライナ兵の視点から「戦争」を考えるとき、そこには「死にたくない」という思いしか残らないのではないかと思う。善もなければ悪もない。戦争では「人が理不尽に死んでいく」事実だけが浮かび上がる。

下の写真は、ベトナム戦争下での有名な報道写真である。やけどを負って、全裸で泣き叫びながら逃げる少女は、ナパーム弾から逃げてきた。

ナパーム弾とは、焼夷爆弾のことである。家や林や人を焼き尽くすことを目的に使用される。第二次世界大戦末期、東京大空襲で使用されたのもこの同系である。ベトナム戦争では、アメリカ軍により、敵の陣地攻撃や森の中にヘリコプターの降下地点を作るのに使用された他、ジャングルに潜む敵歩兵を殲滅するために投下された。現在は焼き払う行為が『非人道的だ』と見なされ、アメリカ軍ではナパーム弾は廃止されている (ウィキペディアより)。

この少女は名前をファン・ティー・キム・フックさんといい、9 月 8 日の朝日新聞で大きく取り上げられていたので、記憶に新しい人も多いだろう。

「南ベトナム解放民族戦線の兵士が村を占拠し自宅にまで入り込んできたため、一家で近くの寺院に避難していました。寺院は安全だと思ったためです。」「近所の人たちと隠れていると、寺院の上空に爆撃機が飛んできて、見上げるとナパーム弾が四つ落ちてきました。解放戦線兵士を攻撃しようとした南ベトナム軍が誤爆したのです。あの時のブブッ、ブブッ、という音は忘れられませ



ん。走って逃げましたが真後ろに落ち、薄手のコットンの服が炎にはぎ取られ、背中や首、左腕に大やけどを負いました。もし頭上に落ちていたら生きてはいなかったでしょう。小さいと二人は亡くなりました。」

やけどを負い泣きながら逃げ惑う少女に、正義も悪も、国家もない。アメリカも解放民族戦線も南ベトナム軍も関係ない！そこにあるのは死への恐怖だけだ。写真の後ろに移っているアメリカ兵の姿が象徴的だ。だが、そうした純粋な「恐怖」は歴史では振り向かれることもなく、この報道写真やキムさんの存在も、政治的なプロパガンダに使われ続けたという。



ベトナム戦争の報道写真からもう一枚。

川の中を必死で戦火から逃れていく家族の写真。母の胸には乳飲み子。写真の子ども達や母親の表情をじっと見てみると、その理不尽な状況を耐えるしかないことに涙を覚える。なぜこんな目に合わなければいけないのだろうか。無事にこの家族は逃げられたのだろうか。今日を生き延びられても、明日も生き延びられるとは限らない。

この純粋な「恐怖」がしっかり記憶され、次代に受け継がれることこそが「歴史」であるはずなのだが、常にこうした記憶は軽んじられ薄められていく。私たちは「殺されたくない」、そして同時に「殺したくない」。「殺されたくない」ことは「殺したくない」ことと同義だ。この思いそのものが「平和」の根っこなのだと思う。

その時代の人々の思いを歴史として受け取ろうとする動きは今までも多くみられてきた。キムさんが証言してきたこともそうだし、日本では、広島・長崎で被爆した人々の言葉も語られ続けてきた。しかし、現在の状況を見渡してみると、いかにそれらの言葉が軽んぜられていることか！「やられる前に、敵基地を破壊することは積極的な防衛だ」「ウクライナで起きたことは日本でも起きる」といった、理屈にならない理屈を議論の俎上にあげる前に、今、「殺されたくない、そして殺したくない」という思いを、「私たちが受け継がなければならない歴史」として大事に扱うことを再び試みなければならないように思う。それが理想論と批判されようとも・・・。

平和につながる学習のための教材が教科書の中には随分とある。それらの多くは、上で述べてきたように「国」ではなく、「個人」の視点で描かれ、授業の中で扱われてきた。それは、学校が子ども達に平和を教える責任を負わされた場所だからだ。振り返れば、長く続いてきた平和教育の成果はどうだったのだろうか。そして現在では、「平和」はどのように学校現場で扱われているのだろうか。

学校が社会に対して担うべき役割はいくつかある。その中の一つが平和な社会をつくることのできる人を育てることだ。しかし、学校教育で行われる内容が、「企業のため」「個人の社会的な成功のための道具」になるにつれ、学校はその役割を忘れてきた。

この Ed.ベンチャーを読んでくださったあなたが、もし学校の先生で日々子ども達の前に立っているのだとしたら、あなたはウクライナとロシアの戦争のことを子ども達にどのように話しましたか？それとも話していませんか？平和のことを、どのように伝えていらっしゃいますか？それとも伝えていませんか？

私たちは、想像力を働かせなければならない。戦車の中で蒸し焼きにされて死んでいくロシア兵士のことを。拷問で死んでいくウクライナ兵士のことを。ナパーム弾で大やけどを負って、泣きながら逃げ惑う少女の思いを・・・。戦争が否応なく正当化されそうな今の状況に、少しでも抗う力を私たちが自分の内側に見つけるためにも！

これからのEd.ベンチャーの学習会

【理論学習会】 10月26日(木)19:00~21:00

テーマ:戦後、求められる「能力」はどのように変遷してきたのか

12月17日(土)13:00~15:00

テーマ:自分なりに学校を具体的に改革してみる

【授業研究会】 11月21日(月)20:00~22:00

女性の働き方についてのカリキュラムづくり

【外国人の子ども理解のための学習会】 事例研究会 10月12日19:00~

【インクルーシブ学習会】 10月19日(水)19:00~21:00 テーマ:愛着障がいについて

11月2日(水)19:00~21:00

テーマ:児童養護施設出身者の声(児童養護施設 唐池学園職員)

12月7日(水)19:00~21:00 テーマ:事例研究(インクルーシブなクラスづくり)



【理事のつぶやき】 3年ぶりに行動制限のない夏休みが終わり、2学期が始まった。引き続き、感染症対策をしながらの学校生活が続いているが、状況に合わせてパーテーションやマスクをしっかりと使いこなす子どもたちを見ていると、その順応性に驚かされる。一方で、ソーシャルディスタンスを取るために、話し合い活動や協力する経験が少なくなってしまうのが気がかりだ。人と関わることで生まれる楽しさを味わってもらいたい。そんなことを思いながら、今日もどんな授業をしようか考えている。(SMK)